

## 2003年5月アメリカ日記

5・6 デルタ 56 便、成田 15:30 定時発で出発。成田空港はがらがらの感じ。アメリカ便は特にチェックがうるさく、預ける荷物も機内持ちこみバッグも開ける。アトランタ行きにしても、客は35%程度で、これではベイするか怪しいものだ。機内食は相変わらずの味だが、アルコールは有料で、ワインの小瓶に500円取られた。ランチの海老天丼は珍しかった。

15:05 定時にアトランタ着。悪天候で、着陸後は激しい雷雨。接続便は延発、16:35が18:15になった。空港内は黒人従業員が目立つ。やはり、ジョージアは南部だ。小型ジェット機でピオリアまで1時間半のフライト。現地時間18:45ピオリア空港着。ローカルな雰囲気だが綺麗。元が休場さんと待っていてくれた。休場さんは東工大工学博士でキャタピラーに勤務する明るい女性。ハーツで三菱ギャランを借りて出発。

休場さんの先導で中華料理店Dynastyに。バイキングで、品数豊富。snow crabと呼ばれるズワイガニの塩ゆでが人気で、この人たちは脚が好みらしく、爪が残る傾向なのはわれわれに好都合。香辛料の使い方は完全にアメリカ風だが、まあ上等な部類。

東ピオリアのMOTEL 6に投宿。ネット予約でツイン/シャワーが@35ドル。朝食はないとのことで、恵子は元と買い物。クーラーボックスと食料を仕入れる。スーパーの会員になって、会員割引を利用したようだ。大きなパルメザンが2本で5ドルなど。

鉄道線路が道路と平面交差する近くなので、列車が通過するときには長く汽笛を鳴らす。最初は何事かと飛び起きてしまった。

5・7 朝、近くを散歩。ホームセンターに山つつじが売っていた。背は低いがしっかりした株で29.99ドル。バラの5ドルにくらべてもちょっと高い。丘のあたりは別荘風に大小の住宅が並ぶ。芝生にSupport Our Troopsの立て看板。一軒の前の木には黄色いリボンが付けてある。スーパーのカウンターには、イラク戦争の特集雑誌が数種類。やはり、戦争をしている国の雰囲気だ。リスは見かけなかったが、野ウサギが跳ねていた。

ポテトサラダ、殻付きピーナッツ、水を購入。

Illinois Central Collegeに寄って、統計学の受講料を払ってから、Eureka Collegeの学生寮へ行く。20平方メートルくらいの個室で、トイレ・シャワーは隣室と共用。絨毯を敷いてコタツ風の机を置く。冷蔵庫が二つ、テレビ、たんすなど。みな、リサイクル品だそうで、次の引き取り手も大体決まっているらしい。建物は新しいので、綺麗だ。メールをチェックして、数通返信。

ピザ屋で昼食。ピュッフェもあったが終了時間が近かったので、ミックスのラージをひとつ注文。3人とも満腹。

図書館で世話になっている司書、事務所でホスト、構内で指導教授にそれぞれ挨拶しながら、学内見学。在学生500人で、ほんとうにこじんまりした大学だ。由緒ある木造の建物や新築の校舎が点々と配置されて、運動設備・学寮も散在。キャンパスの回りは民間の住宅になっている。小教室が中心で、50人を超えるクラスは、芸術メジャー用の小劇場で開かれるとのこと。中庭には、レーガン大統領の胸像があって、その脇にはベルリンの壁が立っている。レーガン記念館には、個人記録などが簡単に展示されている。リスが走る緑豊かなキャンパスだ。

司書とホストの自宅を訪れて夫人にお土産を渡す。いずれも2人の可愛い子持ち。

ICC留学中の賢二君の家に籐椅子を届けてから、ホームセンターを見る。ドアや階段など大型の建具をはじめ、各種の部品がある。ジェットバスも500ドル前後で売っていた。隣のウォールマートで、明日の朝食などを購入。食品類を大型のカートに山盛りに買う光景は珍しくない。

賢二君とアメリカン・ビュッフェの夕食。@8.95ドルで、シニアは60セント引き。ソフトドリンク付きだが、アルコールはない。ローストビーフからアイスクリームまで種類は多い。昨日の中華、昼食のピザ屋と、ビュッフェ・スタイルが多いのに少し驚いた。1970年代にはこのようなスタイルはほとんど見かけなかったと思う。ビュッフェは、どうしても過食になりがちだ。アメリカ人の肥満は人口の40%に近いらしいが、それには、ビュッフェが一役買っていることは確かだ。この店でも巨体の男女が、もりもりと肉を食べ、コーラを何杯も飲む風景があちこちで展開している。

ショア女史の「浪費するアメリカ人」の一面は、過食だろう。これには、食料品の価格が、日本に比べて安いことも一因になっているかもしれない。今朝の殻つきピーナッツにしても、1ポンドが1.8ドルだから、中国産の半値以下だ。

今回目に付くことは、星条旗を掲げた住宅と、新しい乗用車が多いこと。旗は9・11以来、特にアフガン・イラク両戦争の結果だろう。星条旗と黄色いリボンは、ICCの事務室の扉にも貼ってあった。ユーリカ大にはなかったが、これは、学生数が少ないので、出征兵がいないためだろう。もともとは、レーガンの母校だけあって、共和党支持者が多いとのことだから。

昔はよく走っていたポンコツに近い乗用車はほとんど見かけなくなり、新車や新しい乗用車が目立つのは、アメリカ・パプルの遺産か。資産効果とゼロ金利の月賦販売が効いたに違いない。

5・8 夜中に目が覚めたのでブドー酒を開けて寝酒。朝はゆっくり起きて、元を待つが来ないので恵子は心配したがのんびり到着。三菱自動車の現地法人MMNAに出発。Bloomington・Normalにある。

9:30に着いて、秋山さん(事務)と北上さん(技術)に説明を聞いてから工場見学。生産ラインは1本で、5車種を混流生産している。1960年代に広島のマツダで見たことがある混流生産だが、仕組みは違う。ロットで一定時間流すのではなく、最終検査工程では各車種・各仕様・各カラーの車が入り混じって流れている。シャシーは同一だが、ある段階から、組み立て工程の作業時間に車種ごとのむらができないように調整して流すらしい。組立工は、すべてに対応できるよう訓練されている。訓練は、モデルチェンジが行われる前から、訓練車をラインの脇において、随時行っている。見学のときにも、新型のギャランの訓練車が置いてあった。人種構成に対応した従業員雇用が義務付けられているが、見学した組み立てと検査工程では、マイノリティの工員は多くはなかった。シフトによって異なるだろうが、ここの人種構成は、この程度なのだろう。

組み立て工程は、ドアレスで作業をやりやすくし、部品も出来るだけモジュール化して組み付けている。一人が約5mのコンベヤーライン作業を担当している。

従業員約 3300 人は全員が正規雇用者で、パートタイマー・期間工・派遣工はいない。工員は UAW 加盟だから、そうなるらしい。10:50 に午前の作業は停止して昼食に入る。弁当持参でライン脇の休息テーブルで食べたり、従業員食堂へ行く。工員が終わったあとに職員が昼食を取る順番になっている。従業員食堂でご馳走になる。カフェテリア方式で、キツネうどん・カレーライスの和食はじめ各種のランチが選べる。ビーフ・カレーは、なかなかの味だった

クライスラーとの合併で造った工場だが、クライスラーが手を引いてからは三菱自動車 MMC の 100%現地法人になり、ダイムラー・クライスラーと提携後は、外国人 CEO らが入っている。管理は、数値目標を明確にして個人の責任を問う方式となっており、かなり業績は向上したとのこと。

日本式の QC サークル活動や改善運動は、やっちはいるが徹底はしていないらしい。品質検査も、基本はスポット検査で、作業ライン上での個別チェック体制までは出来ていない。もともと農業地帯に立地したので、従業員は農家出身が多く、人柄は良いがのんびりしているようだ。金曜日の欠勤も、子供の授業参観日には沢山出るし、ハンティング解禁日以降はレジャーのための欠勤が増える。プレジャーボートを持っている工員も多く、レジャーの話になると日本人は付いて行けなくなるとのこと。

プレス作業は 10%程度が内製で、タンデムプレス機よりもトランスファープレス機を活用して効率をあげている。混流生産で、ひんばんな金型交換が必要だが、10 分程度で段取りを換えられるという話。プレス部門の効率では、全米で第 1 位になったことがある屈指の工場とのこと。生産効率評価でも、2002 年には第 3 位にランクされている。

エンジンは現在のところ日本からの輸入で、港湾ストのときには、1 日ほどラインを止めざるを得なくなった。現地調達部品は、日系企業からが多い。

午後は、秋山さんが、近くの部品メーカー VUTEQ に連れて行ってくださる。カナダから転勤したばかりの山田副社長に話を聞いてから工場を見学。中部工業の現地法人で、窓ガラス、ドアの内側などの部品を加工生産し、マフラー、マットなどの部品の中継物流をしている。MMNA の生産計画に合わせて JIT で、必要部品をアセンブルしてトラックで搬入する。インジェクションモルダの新鋭機を備えて、炭素樹脂成型を行い、パーツを接着してドア内側部を部品に仕上げる。旭硝子の現地法人から来るガラスにプラスチックやゴムの部品を留め付ける。生産工場の側面と部品置き場の側面を持つ会社で、生産物流業とでもいうべき業態。

従業員は 150 人で、派遣工・パートタイマーが多い。MMNA 工場に比べると黒人の数の多さが際立っている。部品下請けが、コスト削減の要請に応えた結果がこの従業員構成に現れているのかもしれない。MMNA の SUV 生産開始にともなって従業員を増やしていく予定とのこと、日本国内とは違う活気が感じられた。

日本人従業員の悩みはやはり子弟の教育問題で、現地校にかよわせるとともに、土曜日に補習のための日本人学校を開設して対応している。イリノイ州立大学のキャンパス内に施設を借りうけているが、これは、三菱誘致の際にイリノイ州が提供してくれた便益。ピオリアなど周辺地域からも学童が通ってくる。

住宅は借り上げ 1 戸建てで、転勤者がバトンタッチしている。家主は、日本人は綺麗に住むと評価して歓迎しているとのこと。まわりのアメリカ人家庭とくらべて、ゴミの量が違うとの

話。アメリカ人の大量消費・大量放棄には、日本人は驚くようだ。着任そうそうの奥さんが、家庭ゴミに割れたガラスまで入れるのに気がひけて、ガラスに注意と張り紙をしようかと悩んだという話は、日米のゴミ処理感覚の差を象徴している。

帰途、近くのアウトレットモールに寄るが、ナイキのほかはあまり集客力はないようだ。市街地から遠く幹線道路から離れた場所なので、立地が悪かったらしい。ダラーショップも魅力的な品揃えではない。

ユーリカの学寮で一休みして、ネットで宿を予約。Washington市のSuper 8 Motelに投宿。ツイン/バス+朝食で@45ドル。鉄道はなく、静かな宿だ。

元は、9:00からの卒業パーティに行く。夕食は持ち合わせのベーグル・ローストビーフ・チーズとワインで済ませる。元が帰ってきてから、激しい雷雨。

5・9 朝、あたりを散歩。立ち入り禁止の私道に入ると、深い林で、アライグマのような小動物がいる。ほどほどで引き返して、ショッピングセンターに寄る。空き店舗が目立つのは、不況のためか。クローガーでジュースとネーブルを購入。カードがあれば4個1ドルのネーブルだが、カードを持っていかなかったので3個1ドル。

大学へ行く。恵子は元の散髪と洗濯。ワシントンのタコベルでタコスの昼食。大学へ戻ってから、元は卒業式関連行事へ。

恵子とWildlife Prairie State Parkへドライブ。  
@5.5ドルで入園。ビジターセンターで展示を見て、Peoriaというのは、アメリカ・インディアンの部族名と分かった。「荷物を背負って歩く人」という意味。ピオリア族は、その後、ここから移住を続けて、ミズ-リあたりに定住した。この部族とこの市は、今では、まったく関係は無くなっている。売店で黒熊の壁掛けと絵はがきを購入。

園内を歩くと、野鳥のウオークイン・ケージにワイルドチキンなど。白頭ワシが2羽別のケージにいる。傷ついていて自然には戻せないとの説明。英語名はbald eagle、アメリカの象徴は「はげわし」だ。

アメリカ黒熊の原っぱには2頭がいて、草と楓の種子を食べていた。観察小屋は風が通って気持ちが良いのでベンチで昼寝していると、恵子が「熊がジャンプしている」という。まさかと思って見ると、楓の若葉を取るために、本当に跳びついている。ドスンドスン音がするので恵子が気づいたらしい。1回は成功して若葉を手で取ったが、その後は失敗の連続。熊は立ちあがってから、30cmくらいジャンプできる。珍しい光景だった。よほど若葉を食べたかったのだろう。

熊の隣にはエルクの草原が広がり、遠くにはバイソンが群れる。エルクは角が生え換わる時期で、袋角の状態。鶴とカナダ雁の水場から、古い入植者住居の展示を通して、別の黒熊の谷からクーガーとボブキャットの谷へ出る。クーガーは、盛りのついた猫のようにギャーギャー鳴いていた。

ビジターセンターに戻って、反対側の観察台に出ると、パイソンの群れがよく見える。暑いので水場と木陰に集まっていた。園内にはきれいな野の花が咲いている。スイカズラやウコギに似た灌木もある。

大学に戻ると、卒業礼拝の時間。着替えて、学内の卒業パーティ会場に行く。

指導教授のリスター夫妻、英語などで世話になった ICC のウエスト教授（女性）、英語の教授に挨拶。会議場を二つ繋いだ会場にテーブルが並んで、席が指定されている。元が招待したウエスト教授、休場さんに、ハワイに引率してくれたフランス語のフィールド教授（女性）、女子卒業生とその家族が相席。フィールド教授は去年はその女子学生達をセネガルに連れていったが、今年は世界情勢からして国内のハワイに決めたとのこと。

Senior Dinner は、卒業生の司会、卒業生（元を車で送ってくれる男性で、牧師志望）の祈祷、英語教授の祝辞で始まる。会場外にセットされた食事を銘々が取ってきて席で食べる。アルコールはなし。チキンのハム・チーズ・スタッフとローストビーフがメインディッシュ。食後、リスター教授とナフチガー助教授（女性）がスピーチ。リスター教授は、卒業してからの人生で大切なこととして、良き伴侶を持つことや、貯蓄をすることなど、ジェスチュアを交えながらユーモアたっぷりに語り、なかなかの話手だった。助教授は、詩を引用しながら、これからの人生を愛を持って生きようにと話し、最後は、少し涙ぐみながら別れの言葉を告げた。次に卒業生代表の男女 2 名が謝辞を述べ、学生生活のスライド映写（パワーポイント）があつてから、卒業生からの贈り物としてバレーボール・コートの新造する旨が披露された。キャンドルを灯して、3 人のリードで校歌をうたう。最後が相席の女性卒業生 Ms.Farm の感謝の祈祷。

散会后、Hearne 学長に挨拶。ワシントン市に住むウエストさんに、28 日から Cherry Festival だそうだが、桜が咲くのかと尋ねると、桜の木はないとの答えで大笑い。

卒業生 100 人程度で、家族や友人が列席した、じつにファミリーな、雰囲気の良いパーティだった。大規模な大学では、とても、このようには出来ない。

ドライなので元を寮に残して車で帰る。モートルのとなりのスーパーで、ワインを仕入れて、部屋で祝杯。

5・10 朝、道の向かいの Georgetown Commons Apartment を散歩。ひとつが 4 軒から 6 軒の画一的な建物（2 階と 3 階）が、林のなかに 30 棟くらい縦に散在している。郊外でもこのような住居形態があるのは珍しい。並んでいる車はおおむねコンパクト新車で、かつてのアメリカ自動車社会を象徴したような大型車はほとんどない。ベランダに黄色いリボンを付けている家もある。あのリボンは、スーパーで 99 セントで売っていた。「1 銭 5 厘」ならざる「99 セントの出征」だ。

そばのゴルフコースでは、リスが楓の実を食べている。よく見ると、種子は、緑豆くらい大きくてまだ柔らかいから、熊でも喜んで食べるわけだ。

朝食後、雷雨。9:30、大学へ。寮の前の駐車場はほとんど満車。式場の体育館に入ると、リスター夫人がチケット・チェックをしていて、元の傘を渡されて驚いた。

10:30、卒業式 Commencement Exercises 開会。バグパイパーを先頭に、スタッフに続いて卒業生が入場。祈祷のあと、聖歌隊の合唱。ソリストの黒人は美しく歌った。最優秀学生賞の授与のあと、学長挨拶、来賓挨拶。来賓はキャタピラー社のバートン CEO で、イラクの大量破壊兵器がなくなったので世界は平和に近づいた、世界経済の前途は多難、しかし、皆さんは夢を実現できる、努力を惜しまなければと話す。大まじめな挨拶で、ユーモアも少なく、話し上手とはいえない。

学長が、バートン氏に名誉学位を贈呈。卒業生代表 President of the class of 2003 が挨拶して、シャベルと鎖を在校生に手渡す。意味は分からないが学生生活のシンボルらしい。次に、卒業生の数 (102名)、学位の内訳、優秀学生 (AGP による3種類) の数が告げられて、一括して学位授与。学生たちは角帽の房を右から左に移す。それから、名前、学位の種類、教職資格、優秀生区分がアナウンスされて、学長から、一人一人にディプロマが壇上で渡される。

同窓会長はここで結婚した日本人で、祝辞を述べる。チャプレンの祝祷のあと、The Ivy Ceremony。卒業生が輪になって、蔦の長い蔓を手を持つ。校歌を歌いながら、在校生が蔦の蔓を一人づつ切っていく。皆の手に、20cm くらいの蔦蔓が残る。なかなか味のあるセレモニーだ。

散会后、それぞれに記念の写真を撮り、別れを惜しむ。

前夜の会場で、ランチ・サービス。家族・友人と歓談。元と一緒にハワイに行った女子学生の祖父母と話す。

寮でひと休みしてから、シカゴ方面に出発。#55 から #355、#53 でアーリントンに下りる。ミツワ (旧ヤオハン) を探して、買い物。ほとんど日本製品で、日本のスーパーと変わらない。近くのホリデイ・インに投宿。3人で@65ドル。ミツワで買った刺身 (4種)・しめ秋刀魚・うなぎ・ご飯で、元は「幸せ！」。

5・11 朝、風が強く少し寒い。散歩に出たが、道路ばかりで面白くない。ミニハウスが並んだ子供の自転車練習所が珍しいくらいだった。朝食は、ホリデイ・イン自慢のコーヒーとシナモン・ロール、米飯と海苔に味噌汁も。

雨の中、ウッドフォード・ショッピング・モールに出発。全米一とかの巨大モールで、2階1部分3階の十字型の建物の3端にデパート、あいたに多くの店が並ぶ。アイリッシュ・グッズ店でゲール音楽CDを購入、2枚組で17ドル。ゴディバでは、72%カカオの小さい板チョコ。プラスチックのグラインダーが付いた岩塩のミルも購入。ゲーム店で、イラク首脳手配カードを売っていた。歴史資料としてひとつ購入、@10ドル。見事なガラス製の熊があったが、330ドルなのでパス。

次はスエーデンのイケアのショップに。家具・家庭用品の大きな店。合板の家具類はシンプルで安い。日本に来ているような高価品は見当たらない。デザインの良い岩塩ミル、金属ボール型茶入れ、食品保存ケース、ゴムべらなど小物を買う。

商品が豊富で、実用的で且つ安いのが印象的だ。アメリカの消費者は、価格の安さにつられて購買意欲を高める面がありそうだ。日本では、やはり、価格の点で、消費者の財布の

ひもが緩まないのではないか。

スーパーで夕食の買い物をしてから、シカゴ市内方向へ東に走る。昼食時間が中途半端になったので、車中でシナモンロールなどで済ます。雨が降り続けているので、シカゴ市内見物はやめて、ミシガン・シティのアウトレット・モールに行くことにして、#94に乗るが大混雑。のろのろ走って、時間がかかり、モールはすでに6時で閉店。#94に戻って、モテルを探し、スーパー8モテルに入る。50ドル。

部屋で夕食。チキン丸焼き、ローストビーフ、エンダイブ、パンとワインで、母の日を祝う。

5・12 朝は#94の陸橋まで歩く。5:30ころだが、大型トレーラーやタンクローリーが疾走して、アメリカ経済の巨大さを感じさせる。早朝出勤の乗用車も多く、これは「働きすぎるアメリカ人」の印象だ。

朝食のサービスは大きな菓子パンとコーヒー。ネットに繋がろうとするが、うまく行かない。XPでのGRIC接続法を読んでこなかったのが致命傷。今夜のホテルが決まらないままに、味の素の手嶋さんに電話で連絡すると、会社近くのアメリカスイートを予約して下さるとのこと。もう一度後刻電話することにして、アウトレットに出かける。公衆電話で予約を確認して、道順を教えていただく。ハッシュパピーで靴を購入。車で昼寝中に、恵子と元は更にショッピング。コーチでベルトが安いというので3本購入してから出発。

途中のアンティーク・ショップに寄ると品数豊富。Steak in Shakeでハンバーガーの昼食。#94でシカゴに。少し時間が早いので、オリエント博物館に寄るが月曜は休館。科学産業博物館を見ながら、ミシガン湖畔を走って#90に乗り、80の出口で下りる。アメリカスイートを探すが、見当たらず、オヘア空港まで走ってしまう。戻って、ヒンギス通りを左折、今度は、番地を見ながら行くと8101にはSpring Hill Suites Marriottがあるので入ると、ここが昔のアメリカスイートだった。手嶋さんがコーポレート・レートで予約しておいてくださった。

6:00に手嶋さんが迎えに来てくださる。和食をとお願いしたので、かなり遠くまで走って、煉瓦亭に。元が食べたいものを注文。すし・てんぷら・幕の内、枝豆・山かけ・胡麻合えなど、ビールと日本酒。元はすっかり満足。すしくらいはイリノイでも食べられるが、てんぷらは久しぶりだとかいって、パクつく。

ここは、もとはフランスのオルサンとの合併でつくった会社だが、1994年から味の素単独出資になる。味の素ハートランドリジン社で、手嶋さんが社長。手嶋さんは、ヨーロッパに7年勤務してから、日本に帰ったが、2年たらずして去年の10月に、この社長で赴任。味の素の海外勤務は、前から長い。手嶋さんは、海外勤務を楽しんでいる様子。

ヨーロッパでは輸液など薬用アミノ酸だったが、ここでは、飼料用のバルクの商売。インテグレーターと呼ばれるブリーディングから食肉まで一貫生産の企業や、飼料加工会社、それから農協の一括購入が顧客。バルクで買って、余分を再販売する会社もあるので、苦労は多いらしい。

ヨーロッパとアメリカの違うところの話は面白かった。空港のカートが、イギリスはブレーキをかけると止まる方式、ドイツはブレーキをはずすと動く方式、アメリカは、ブレーキがない方式というのが、欧米の差という指摘は鋭い。走りながら考えるのと、考えてから走りだすとの違いか？日本は、走りだしたら考えない、ときに考えなくても走りだす？

アメリカの生活は、野菜・果物の豊富な点でヨーロッパよりも良いし、ドイツのように近隣へ細かい気遣いをしなくていいのも良いとのこと。アメリカ人は、衣服にはあまり気を配らないが、電気製品は大好きで、すぐに新製品に飛びつくという。このあたりにはプール付きの家は見当たらないから外からは分からないが、家の中は電気製品で溢れているのかもしれない。ホテルまで送っていただく。さらに、明日、会社のネットに繋がせていただくことにした。

5・13 朝は、向かいの住宅地を散歩。150坪くらいの区画に平屋が並んでいる。前庭に柵はないが、後庭には生垣や板の囲いがしてある。芝生が多く、花壇にしている家は少ない。リスやウサギもいる。オヘアは of hare だから、ウサギは沢山いたのだろう。

ホテルのビジネス・センターのコンピュータは日本語が表示できるので、GRICの使い方を印刷した。部屋で試みると成功したので、味の素に電話して手嶋さんにネット借用は不要になった旨連絡してもらう。

ホテルの朝食はオートミールとリンゴにする。パンやヨーグルトなどは、おおむね甘い。カロリー過剰になり、肥満が多いのはうなずける。手嶋さんから電話をいただいたので、お礼を申し上げる。

シカゴ市内に出発。地下駐車場に車をとめて、シカゴ美術館に行く。今日は火曜日の無料公開日でかなり混雑。印象派の部屋には日本並みの人の波。収集作品は多く、まんべんない感じ。ピカソの母と子が目玉で、はじめは左側に父親がいて子供に魚を差し出している絵柄だったが、ピカソは気に入らなくなって、父親を切ってしまう、母と子だけに変えたという絵。切られた父親の原画も隣に掛かっている。たしかに、父親は無いほうが絵としては迫力がある。子の眼差しと手は、父が差し出す魚に向いたままだから、見る人の想像力をかき立てる効果が出ている。

三菱銀行が寄贈した東洋美術室も在り、仏像やアメリカのコレクター達の浮世絵などの収集品が飾られている。フラッシュなしの写真は撮れる。ピカソ・モネ・クレー・ミレー・セザンヌや唐三彩馬など。

美術館の湖よりの建物は、旧シカゴ株式取引所で今は多目的ホールになっている。外には取引所の入り口のアーチが保存されている。

地下駐車場の上のミシガン湖が見える公園で、手作りサンドイッチの昼食。シカゴの中心部のビル街が一望。シカゴ商品取引所もこの中にあるのだろう。リンゴやリラや草花が咲き、天気が良く、気分は最高。

シカゴを離れて、#94を南下してミシガンシティに。またアウトレットによって、CDと大型ワイン抜きを仕入れる。クラシック・ディラン・バエズ・エンヤ。安いのは3ドル、高くても18ドル。クラシック・アイスクリームも食べる。ミシガンシティといっても、インディアナ州にある。

#94を進むと、ミシガン州に入る。北上してから東に向かう。起伏のほとんどない大地に畑・牧場・林が延々と続く。この広大な土地に、それぞれ私有権を確定していったアメリカの歴史を考えさせられる。4時間ほど走ってフォード博物館があるディアボーン近くのRomulusでBest Westernが朝食付き59ドルなので投宿。室内プールやフィットネス機器も備えている綺麗なホテルだ。

買い物にKrogerに行き、ソーセージ・サラダ・パン・オレンジジュースなどを仕入れて、部屋で夕食。時差があって、12時過ぎの遅い食事になった。

ネットに繋がらなかつたら、受話器からコードが抜けない。接続コードを持ってこなかったのはまずかった。

5・14 散歩は#94沿いの道で単調。カナダ雁がいる湿地がレストラン・ホテル・オフィス向けに売りに出てる。立て看板には、liquor licence available と書いてある。酒類販売には免許が必要で、ここは取得が可能な土地なのだろう。すごい音がして早朝の到着機が着陸する。デトロイト国際空港は、#94の向こう側だ。

ロビーのパンフレットをながめると、The Road is Ours というのがある。フォードが今年の6月に100年記念祭をやる。T型の組み立て実演を見せるらしい。

朝食はお婆さんのサービングで、ジュース・パン・シリアル・果物・飲み物のオーダー方式。電話機を換えてもらってネットに接続してメールを確認できた。

#94を走って、ディアボーンのフォード博物館に行く。受付で訊ねたが、フォードの工場見学ツアーは、今はやっておらず、6月には再開すること。大掛かりな産業技術展示で、フォードT型をはじめとする代表的車種、歴代大統領の乗用リンカーン、他社の代表的乗用車、から、各年代のミシン、産業機械、蒸気機関、発電機、鉄道車両、航空機など。エジソン社でヘンリー・フォードが造った大規模な火力発電装置も実物大で置いてある。多分、フォードがエジソン社の技術者時代に造った最初の自動車もある。1917年のT型には、乗りこんで記念写真が撮れる。850ドルで売らだしてから価格を下げて、380ドルになった車だ。その後、270ドルまで下がる。

ドイツのこの種の博物館に比べると、学術的というよりもショウ的に展示されている。プラスチック・インジェクション・モルダーのところでは、1ドル入れると、リンカーン像や機関車・自動車が成型できる装置が置いてある。50セントと1セントで、1セント貨がペチャンコの楕円形のフォードT型刻印メダルになる装置も。小学生達が、たくさん見学に来ているが、黒人が目立つ。

ミシガン・アベニューをデトロイトに向かう。市中心のビル街はあまり高くはない。近づくると市中心の周辺部分はゴーストタウン化している。再開発予定が掲示されている個所もあるが、多くは未決定のようだ。センタースクエアも再開発中。昼食をとろうとBelle Isleに渡ったが、レストランはない。川中島のBelle Isleの対岸はカナダで、沿岸警備隊の基地もある。動物園と水族館も在った。

車中でパンをかじりながら、市中に戻って中央道路を北上してデトロイト公立図書館に行く。案内係にJ.Dodgeに関する資料を訊ねると、はじめは、乗用車のダッジと間違えられた。Burton Historical Collectionを教えてくれる。ウェブで検索してドッジ・ペーパーしかないのはほぼ分かっていたが、念のため行ってみる。訊ねると、やはりドッジ文書のリストしか出てこなかった。リストのIntroduction5ページをコピーして帰る。日本では有名なのに、ここでは伝記はおろか、関係論文もないのは、ちょっと驚きだ。

アメリカで最初に出来た動物園が在って、大きな白熊に会えるらしいが、少しくたびれたのでパスして、カナダに向かう。#94で約1時間、Port Huronから1.5ドルで橋を渡って、車の中に居るままで、パスポートを提示して入国審査を受ける。カナダに入国すると、反対車

線にはトレーラートラックの長い列。なぜ動かないのかは分からない。橋の料金が安くなる時間待ちか？

カナダの方が、牧場として拓いた広い草が目立つて、土地の有効利用率が高い感じだ。2時間走って、London で市街地に入る。インフォメーションに行くが営業時間過ぎ。B&B の位置をドアの地図で確認したが、結局、Best Western に 114 カナダドルで投宿。

近くのスーパーで、スモークサーモン2種、ムール貝のサラダ、タコのサラダ、大きなハム、缶スープ、アスパラガスと芽キャベツ、マヨネーズ、パン、白ワインなどを購入して、部屋で豪華な夕食。持参の湯沸かし器で茹でたアスパラと芽キャベツは美味しかった。ワインはオンタリオ産で美味しい。国境を超えるとこんなにスーパーの品揃えが変わるとは面白い。やはり、北欧系・ゲルマン系の多いアメリカよりも、ラテン系が多いカナダの方が、味覚には敏感なのかもしれない。新規購入のワイン・オープナーは、きわめて使い勝手が良い。大げさな出来だけあって、2ストロークでコルクが抜ける。

ペティ・トーフのベリー味デザートというがあるので、後学のために購入。ブルーベリー味の薄甘い豆腐で、まあ食べられる。低カロリーのプリンというところだ。

5・15 朝、ホテル裏の住宅地を散歩したが、板塀に囲まれていて抜けられず、もとに戻ってしまった。あとから気づいたが、ここロンドンの住宅地は、板塀や煉瓦塀で囲まれているところが多い。広く住宅地として区画して道を四方に通すのではなく、比較的狭い土地を囲い込んで New Home として売り出すためらしい。道路の反対側には柵で囲まれた芝生の緑地が広がり、遠くにビルが見える。歩いていくと、ホスピタルと書いてある。恵まれた病院だ。この反対側にも大きな病院がある。広大な空間のなかでは、気分も良く、病気も早く治ることだろう。

部屋で朝食後、オールド・ロンドンに向かう。古い家並みが続く。つぎに郊外のパイオニア・ビレッジを見る。@5ドルで入ると、移築した農家・醸造所・教会・学校・商店・鍛冶屋などがあり、当時の装束のボランティアたちが、ツア・ガイドや補修作業をしている。

郊外の逆のはずれの考古学博物館へ。@3.5ドルで入場すると、まず説明ビデオを見せる。展示は、3万年ほど前からのカナダ・インディアンの遺物、石骨器の斧・矢じり・スクレーパー、土器が中心。展示の質はあまり高くはない。

展示館のそとに、西暦1500年頃の集落の遺跡が一部復元されている。周りを、木柵と丸太を立てた隙間の大きい塀で囲い、なかに、大小の Long House と倉庫が並んでいる。建物の復元は小さいロングハウスだけ。Mohouk インディアンの1000人くらいの集落。モルガンが紹介したイロクオイ族の集落にあったメンナー・ハウスや酋長の家はないようだ。ロングハウスはもっと長いかと想像していたが、15m程度だ。前後に丸みのついた「かまぼこ」型で、前後に出入り口があり、木の皮を屋根と壁に使った建築。中は、2段のベッドが並び、いくつかの竈がある。共同体を考えるのに面白い素材だ。ただ、なぜこんなに厳重な防御柵が必要だったのか疑問が残る。動物に対するものではなかろうから、他の部族との抗争に備えたのだろう。

かなり素敵な民芸品があった。この彫刻家が創った石彫りの熊を70カナダドルで購入。ここは私有地だったところで、遺跡が出て発掘されたので、南オンタリオ大学に寄贈された。

つぎは、メープル・ファームに向かうが、ロンドン市街地図の外なので迷ってしまう。途中の建築内装ショップで道を聞いてようやくたどり着いたが、留守。帰ろうとしたら農道を車が来たので待つと、ここの農場主だった。# 1 Medium のメープル・シロップを購入。メープル・バターはなかった。砂糖楓の樹を訊ねると、農場中庭の3本を指した。もちろん生産樹は離れた栽培地にあり、約3000本から樹液を3月に採るとのこと。4リットルのシロップのためには40ガロンの樹液が必要で、シロップをさらに煮詰めるとバターになり、さらに煮るとメープル・シュガーが出来る。楓の葉型に固めたメープル・シュガーを3つくれた。背の高いナイスガイだ。これからの季節は牧畜をやるようだ。

ロンドン市を流れるテムズ河近くの広い公園に車を留めて手作りサンドイッチの昼食。メープル・シュガーの上品な甘さと高い香りを楽しみながら、ナイアガラヘドライブ。

途中でハイウエーを下りてガソリンを補給。ハミルトンから QEW に乗る。沿道にはブドウ園や果樹園が続き、ワイナリーの看板が沢山出ている。ナイアガラ・ワインの産地だ。プラム類の果樹は、赤や桃色の花、リンゴは白い花を美しく咲かせている。ナイアガラに近づくところで、恵子が、Niagara on the lake が良いところらしいと言い出したので、東に道を外れて走る。？のサインを追っていくと、美しい市街地に入ったが、？が見つからない。街を回った末に遊覧馬車の御者に聞くとすぐ近くの商業会議所の裏だった。B&B を紹介してもらう。紹介手数料は3.5ドル。このB&Bの客室は半地下だが明るい部屋で、クイーンとシングルの2ベッド/シャワー。男女2人の子持ちの初老の夫婦の経営で、124カナダドル。他にもう1部屋貸すらしい。

恵子と Prince of Wales ホテルのレストランへ。5種のキノコのクリームスープ、野菜サラダ、ブイヤベース、シーフード・パスタ、グラスの白ワイン2種で、かなり質が良かった。チップ込みで120カナダドル。

この街は、アメリカの独立戦争のときに、イギリス軍が最後の拠点を構えたところだ。負けた英軍の生き残りが Fort George を作って反撃したが、1812年からの戦争で最終的に敗北した。連邦軍は、砦や町を徹底的に破壊したので、今の街はその後には再建された。それでも、オンタリオ州で最初の図書館が建てられるなど、カナダでは古い伝統の街だ。

エリー湖からオンタリオ湖に流れるナイアガラ河の下流でオンタリオ湖に面している。東に行けば、2001年に訪れた、大渦や植物園、花時計を経てナイアガラ・フォールズに至る。

5・16 小雨の中、傘をさして散歩に出る。古い墓石が3つ立つのはかつてバプテスト教会が在った場所で、黒人の墓。サイト案内板には、ここは上部カナダ Upper Canada で最初に奴隷禁止令をだした地域で、1795年のことと書いてある。

モクレン・レンギョウ・スオウ・リンゴ・プラムの花が咲きそろって美しい。オンタリオ湖に近づくとき潮騒の音が聞こえる。湖に面して、星型の小さな砦がある。ここらはセネカ族のテリトリーだったが、のちに Missisauqua 族が住んだ場所で、イギリス軍が独立戦争期に Fort Missisauqua を造ったが、1813年に陥落した。堀と土塁をめぐらせた中に小型のレンガ造りの建物があり、縦長の銃眼が付いている。湖に面した土塁には大砲眼があり、そこをくぐるとオンタリオ湖が波立って見える。対岸のアメリカも見える。かつてはここで軍艦との攻防戦が展開されたようだ。

要塞の他の敷地はゴルフ場になっていて、早朝から芝刈機が動いていた。綺麗な家や花・若葉を撮りながら市中心部に向けて歩く。少し大きめの邸宅がおもだが、大きなマンションやエステートも散在し、テニスコート、あずまや、手入れされた庭園を持つものもある。B&Bも散在している。

?があったのは、かつての地方議会議事堂で、図書館にもなっている建物だった。こじんまりした美しい商店街で、しゃれたウインドウの店が並んでいる。たしかに滝の近くよりも、はるかに気がきいた街だ。帰ってきて、元の注文の半地下式建築の特徴をとらえた角度から、この家の写真を撮る。改築の参考にしたいとか。

朝食は、チーズ・ブルーベリー・アップルの3種類のパン、マフィンカップにパンを敷いて卵を割り込んでオープン焼きした珍しい卵料理、ソーセージ、トマトサラダ、果物、コーヒーで、B&Bらしいもてなし。同宿は日本にも来たことのあるミシガンからの老夫婦で、世間話はずむ。Shaw Theaterのミュージカルを見に来たとのことで、前にはワイン・ツアに参加したと話していたから、この市の常連らしい。B.Shawの銅像を市中で見たのでこの市との関係を聞くと、特にはなく、劇場を作る時に、近代劇をレパートリーにする意図で名付けたとのこと。

ワイナリーを目指して出発。途中のOrchard Shopに寄ると、いまは果実はなく、メープルシロップやジャム類、ナッツ類が主。メープル・ファッジをひとつ買う。はじめにあったワイナリーで、白を数種類試飲したが、気に入らず、5ドル払って出る。2、3のワイナリーを過ぎるうちに、花時計に来てしまったのでそのままフォールに行く。2001年に泊まったB&Bの前を通る。小雨で肌寒く、観光客は極めて少ない。カジノの下あたりの2時間無料の駐車スペースも空いていたので、駐車して傘をさしながらテーブルロックまで歩くが風もあって寒い。2滝間の島の崖下部には碎石が急な斜面を作っていて、そこでカモメが営巣しているらしく、おびただしい数が双眼鏡で見える。チューリップとヒヤシンスの植えこみが綺麗だ。テーブルロックから先は二人に歩かせて、車をとりに戻る。芝生の中の立ち木には、名前札がついている。Sugar Maple, Horsechestnut, Dutch Elm, Common Elm などなど。

ホテルを探して大橋巨泉の店の駐車場に入る。二人が店に入る間に、マリオットで聞くと、179ドルでFallviewの部屋があるという。ペンディングにして、OKショップに戻ると、30周年記念セール中で、メープル・チョコレート、メープル・コーヒーを経営史研究所のお土産に購入する。ナイアガラ店はまだ15年くらいだが、バンクーバー店がもう30年らしい。でも、日本人はじめ、客はほとんどいない。やはり、テロやサースの影響か？木彫りの熊もひとつ。

どのホテルが滝の見晴らしが良いかを考えながら、ヒルトンで聞くと、149ドルというので投宿。31階の2滝が良く見える部屋で、定価は1450ドルと書いてある。すごいディスカウントだ。しかも、バスはジャグジー。ただ、問題は、前に新しいカジノが建築中でタワーが2滝の間に立っているし、見下ろすと工事現場で、クレーンも立っている。どのくらいの高さのビルが立つのか判らないが、ヒルトンにしては、営業妨害に近い。

この33階のレストランも良さそうなので、はじめ予定したスカイロンでの夕食は止めにする。

荷物を置いて、カナダ企業のアウトレット・モールに行くが、どこも同じようで、元も買い気を示さない。ダラー・ショップ、つまり80円ショップに入ると、いろいろな商品が溢れて

いて、客も多く、日本の100円ストアと同じ様子。電気小物からプラスチック製品まで、Made in Chinaが多い。ひとつ残っていた白熊人形を購入。

ワイナリー探しを再開して、パンフレットで所在地を見ながら走る。桃色や白の花の果樹園がブドウ畑の間に広がる。サクラノボの木もある。Pillitterで白3本、Pellerで赤2本を仕入れる。試飲料はメニューには書いてあるが、ボトルを買うとタダだ。昨夜の白が美味しかったので探したのだが、銘柄を忘れたので発見できない。Niagara on the Lake 近くなので、Prince of Wales まで行ってワインリストを見せてもらおうと、プリティッシュ・コロンビアのワイナリー物だったので諦める。

Niagara on the Lake 市中を散歩して、菓子屋で恵子が作る旅行用クールの菓子に似ているのを見つけ、参考までにタルト4種類を6個小生が購入。二人はあきれている。

ホテルに戻って、夕食を予約し、ジャグジーで憩う。二人は朝食用品の買いだしに行く。

8:30にレストランへ。窓からひとつ離れた席だったが、窓際が空いたので移る。2滝が良く見える。

カナダのスパークリングワインで乾杯。スープ、前菜盛り合わせ、シュリンプカクテル、ラム、サーモン、チキン、アイスクリーム、チーズケーキ、コーヒー。スープのコショウがきつかった他はまあまあ味の味。チップを入れて380ドル。もう1階上のラウンジでは、ギターのライブ。

9:00からは滝のライトアップ、10:00からは金・土・日恒例の花火で、なかなか良い。前のときは橋付近で見た花火を、今回は上から見る。花火見物としては下から見上げる方が美しいが、上からはめったに見られないから面白い。ゆっくりしてから部屋に戻る。

5・17 朝はナイアガラ上流に散歩。ゴルフ場を横切って、マリノランド前を通過して、池を左に曲がる坂を下りる。池には水が少なく泥沼状。説明板には、ここはかつては河が流れ込んでいた島で、水力を利用したカナダで最初に鋼材を造った製鉄所があったが、1814年にアメリカ軍に破壊され、その後再建されなかったと書いてあった。

滝方向に戻ると発電用の取水施設と発電所がある。釣り人がいて1匹マスに似た魚をつりあげていた。美味しいのかとたずねるとイエスといってにんまりしていた。沢山は釣れないらしい。

植物園(温室)への道のモクレンの並木は見事だ。カナダ滝の脇はしづきの雨。ケーブルカーの先の道を登って帰室。ジャグジーで体を暖めるが、湯温が上がらない。ヒルトンともあるホテルにしてはお粗末だ。

朝食後、まず大渦見物に行く。前回は強風で運行中止になっていたスパニッシュ・エアロ・カーに乗る。この地点でナイアガラ河が大きく右に曲がるので大きな渦ができるが、ゴンドラで真上から見下るとなかなか壮観。切り立つ断崖の下では、どうやって下りたのか、釣り人がかなりいる。カナダ側は下りられそうだが、アメリカ側は難しそう。ゴンドラの係員に聞くと、トレイルがあるがかなり危険な道だそう。

次はバタフライ・オブザバトリー。沢山の蝶が舞う美しい温室だ。前回と同じのもいるし、初顔も多い。一年中を通して羽化させているようだ。幼虫もサナギも見られる。

滝に戻って、元は恵子と霧の乙女号に乗る。小生は車で日記を書く。帰ってきて、恵子は、この前よりも水量が多いという。

アメリカに渡ってゴート島で3姉妹島からのカナダ滝上流を見る。河の水はあまり冷たくはない。

広場のベンチで昼食。カモメがやってきてこっちをながめているのでパンを一切れ投げたら、素早くくわえて呑みこんでしまった。餌付けは悪かろうと、それだけにしたら、一声鳴いて行ってしまった。きっと、「ケチ」と言ったに違いない。

ホースシュー滝の上の観覧スポットは立ち入り禁止になっていた。アメリカ滝へまわると、滝の落ち口へ下りた連中が、足場にまで流れる水に足をすくわれそうになっている。確かに水量は2001年秋より多いようだ。アメリカ滝を二つに分ける小島に行ってから、滝と別れる。

ナイアガラ・プレミアム・モールに行く。元はお目当てのハッシュパピーの店が2週間前に閉店と知ってガックリ。眠いので車で昼寝すること小1時間、靴を一足買って二人が帰ってきた。

南に進んで、バッファローに至るが、宿探しでひと苦労。道に戻ってアマーストのスーパー8モーターに@64ドルで投宿。スーパーの買い物で夕食。宿の若い男性に聞いたときには、3分走ればあるといわれたTOPSが無いのでガソリンスタンドで聞くとすぐ近くだった。10分近くかかる距離で、彼はスピード狂に違いないという結論。

#219、#66から#80に入って西走、#79を南に折れてすぐのGrove Cityのホリデイイン・エクスプレスに@75ドルで投宿。スーパーのありかを聞いて、買出しに出る。迷って手作りアイスクリーム店で聞くとすぐ前の道沿いとのこと。ついでに買ったアイスクリームは美味しかった。

ローストビーフなどで夕食。ローストビーフといってもハムに近い長持ち製法のもので、カナダのスーパーで売る本物とは違うところがアメリカだ。外食では運転者が飲めないのも、部屋食が多くなるが、冷たい料理になる。今回は電気ポットがあるので、今日は、2ドルで買った大きなカリフラワーの一部を茹でて、楽しむ。カップヌードルも旅では1品になる。

ネットは、ローカルで掛けられる電話局に接続点がないので見送る。昨夜は、エリアは同じでもローカル扱いでない接続点に繋いでいたので、18ドルもとられてしまった。普通は、ローカル発信では繋がらない番号なのに、繋がってしまったから、ホテル側の処置不足だと元が抗議したが、電話取り扱い書にローカル扱い局が書いてあったのをこっちが見落としした不注意があるのでいたしかたない。

5・18 朝の散歩はやめて、ネットで今後の旅のコースを研究。ヤフーの距離検索は良くできていて便利だ。朝食にはドーナッツが出ていた。肥る方向にしか食事は向いていないようだ。

Clarenceに出発。歴史的町と書いてあったがそれほど古くはない。骨董店が多いとも書いてあったので進んでいくと骨董市があり、広い常設店舗のほかにも青空出店が驚くほどの数だ。

ただ古いだけというガラクタが多いが、どこからあれほどの店が集まるのか不思議だ。二人は喜んでめぼしいものを探し始めた。店内で恵子の写真を撮ると、店のおばさんが、写真撮影には許可が必要だという。展示品の写真を撮って他人に売りつけて利鞘を稼ぐ人間が居るからだというので、再生して見せて、家内を撮ったのだと言ったら、それは売れないだろうから OK だと笑っていた。店を全部覗こうという二人には付きあいきれないので早く車に戻る。途中で鋏型爪きりを 1 ドルで買ってきて、爪を切る。二人はガラス製品などを買って帰ってきた。

次は Armish Country を目指す。途中で道を間違えて、バーガーキングで昼食後、進路を修正して # 6 2 に戻り、Leon 方向に走る。Dayton あたりから馬車に注意の道路標識が出る。馬車のある家が見えた。やがて向こうから馬車が走ってきた。前方にも馬車が走り、追い越す。道には馬糞。電線が入っていない家もあり、建物は古く、薪が積んである。古風な洋服の子供達もいる。アメリカも広いものだ。ここのアーミッシュは、普通人と混住しているらしい。

# 8 6 を Salamanca に向かう。Allegany 州立公園北側で、起伏も豊かな道だ。Seneca 族の居留地 Seneca Nation Administrative Area があって、Game 場つまりカジノがある。Seneca Iroquois National Museum に入る。@ 4 ドル、シニア 3 ドル、学生 3 ドルをセネカ族の若者が徴収。石器、土器、ロングハウスモデルなどが展示されているが、国立博物館と言うにはいささかお粗末。先日見たカナダ・ロンドンの考古学博物館の方が、まだしっかりしている。面白かったのは、1700 年代に結ばれたアメリカとの協定書。酋長達の赤い押印（血判？）があり、セネカ達は、拘束力 Binding のある協定と信じていたが、アメリカはやがて協定を侵犯して、居留地の面積を小さくしてしまった。

いまでは、川沿いの幅の狭い細長いところしか認められていない。居留地に入ると、朽ちた家や、新しくてもみすばらしい家が多く、小さくて粗末な平屋の教会が立っている。病院だけは立派だ。アルコール依存症が多いと聞かすが、この家と病院のコントラストは、ネイティブ・アメリカンの現在を象徴しているようだ。博物館の係の若者も、英語が達者とはいえず、聞き取りにくい発音だったし、料金をはじめはただ @ 4 ドル × 3 の 1 2 ドルを請求したりで気が利かない。十分な教育を受ける機会が与えられているのか疑問を感じてしまう。

お粗末な博物館とカジノ特権を与えた程度で、彼らのテリトリーを巻き上げた罪滅ぼしをしようというなら、それは、アメリカの身勝手というものだ。この国のかたち造りを理解する上で、アメリカの原罪、インディアン殺しの意味は重要だ。国の奥深いところに、原初的な暴力が隠れている。その 2 次的な姿はデカプリオの「ギャング・オブ・ニューヨーク」にはっきり現れ、ベトナム戦争・湾岸戦争・イラク戦争と繋がっていく。

ここにはネイティブ・アメリカン関係の見学スポットが多いかと思って宿泊予定を組んだが、見るべきものが少ないので先を走ることにする。州立公園の南は国立森林地帯で、その東側を南下するドライブはすばらしい。平原の単調なドライブとは違って、起伏を縫うように走ると、信州の道を走っているような感じだ。ペンシルベニアに入り、さらに緩やかな高低差のある道を走る。道には野生動物の交通事故遺体があり、ウサギ、リス、狸？が多いが、コジカも 1 頭倒れていた。鹿に注意の道路標識のあるところだから、よくある出来事なのかもしれない。

5・19 散歩に出ると隣は小さい空港で、小型機とグライダーが並んでいた。寒いので早々に引き返す。宿の出口の前は、陸軍地雷班の小さいデポで、機関銃の古いのが門前に飾りに置いてある。

コイン・ランドリーに洗濯物を居れてから朝食。ホリデイインの朝食はシナモンロールが呼び物で、まあ美味しい。

昨日のアーミッシュが印象的だったので、オハイオの居住区をネットで検索すると、コロンバスへ行く途中にあるので、立ち寄ることにする。

ここの町にプライム・モールがあることが分かって元は大喜び。まずはショッピング。ハッシュパピーで3足。

アーミッシュが住むホルムズ・カウンティに向かう。Akron から南に# 77を Canton に走り、迷いながら# 62に乗って Berlin へ。Winesburg あたりから馬車のある家が始まり、電線が入っていない古い家には洗濯物が庭に紐で干してある。古風なドレスを着て、頭髪を後ろで白い帽子でまとめた女性が働いている。畑では、2頭立てと4頭立てで馬耕をやっている。4輪の有蓋黒塗りの馬車や2人乗り2輪の無蓋馬車も走る。ここも普通人と共生している場所だ。小型の風車がまわっていたり、電線は無いのにアンテナがたつ家もある。

Berlin は売店・レストランのある賑やかな町。道端に駐車して、レストランで昼食。ローストビーフ、サンドイッチ2種、スープ。チキンスープは、具沢山のドイツ風。アーミッシュのルーツはオランダあたりらしい。骨董店、キルトや家具・雑貨の店などを覗く。ミニ観光地化して商業主義が過ぎて、アーミッシュらしさが無い。馬車にも乗れるようで、町中心を外れたところで観光客が乗り降りしていた。

Millersburg は普通の町、Killbuck を過ぎて Holmes カウンティを抜けても馬車に注意の交通標識があり、1台、黒い帽子、黒衣でひげの伸びた老人とやはり黒衣の夫人が乗った馬車とすれ違った。その後は、高低差のある曲がりくねった山道を走る。ここも信州を思いださせる風景だ。やがて平原地帯に入って広々とした平面をひたすら走り、コロンバス近くで# 62から高速道路に乗って、# 71を西南に進む。鹿の交通事故が3件、ウサギ・狸？などは無数にやられている。タイヤの破裂破片がかなり沢山落ちている。多輪トラックは、バーストすることが多いようだ。道路ゴミは、人力で拾い集めるらしく、ところどころに黒いビニール袋が点在する箇所がある。あとで、集める車が来るのだろう。

ガス給油のために下りたところは Deer Lake 州立公園近くなので、ついでに公園を見に行く。9マイルほどのところに広大な公園があり、ロッジ・キャビン・キャンプ場・ゴルフコースが設けられている。散歩する人・自転車に乗る人が2組いた。

# 71に戻ってシンシナティ郊外の Mason で下りて、Best Western に60ドルで投宿。部屋にマイクロウエーブがあってソーセージを温め、カリフラワーをチンして、昼食に用意したサンドイッチで夕食。ナイアガラの高級ワインをあける。

5・20 雨で散歩はできず。DENSO の山中副社長に電話をするが不在でメッセージを残す。

シンシナティ郊外の Antique Mall に立ち寄る。巨大な建物の中にガラス扉付き陳列ケースの列が並び小物を展示するコーナー、20㎡くらいの場所に家具・雑具・食器・装飾品などを展示するコーナー、家具の部品（新品）を売るコーナーなどがある。熊モノを探したが、あるのはティベア系かプー系のぬいぐるみ。黒熊親子の木登りをモチーフにしたコート掛けがあったが、持ちかえるには大きすぎる。

クマがラケットでボールを打つ動くおもちゃは愛嬌がある。こんど作ってみよう。

アメリカ人の特性のひとつにアンティーク好きを挙げて良いだろう。高級品からただの古物にいたるまで、あらゆる市にアンティーク・ショップがあり、ある種のリサイクルが行われている。ガレージ・セール、ヤード・セールが盛んなところからも、古物を再利用することに慣れているようだ。日本でも、清掃工場で大型家具などのリサイクルをやっているが、これは、まず利用者が捨てる場所が出発点のリサイクルで、アメリカ流とは違う。大量消費・大量廃棄とはいうが、一部の消費財の廃棄の点では、新品好きの日本人の方がムダをしているようだ。

雨も止んだのでシンシナティ動物園を訪れる。目当ては白熊。まず世界の鳥のコーナー。建物の中にガラス窓のある小部屋を並べて、珍しい鳥を見せているが、これは鳥たちに与えるストレスが大きそうだ。

黒熊のつぎはパンダになりそになったような顔に白模様のある熊、そして白熊。2匹は寝ていたが、つぎの檻の1頭はガラス張りの水槽で泳いでいた。実に巧みに泳ぎ、ターン時には背泳スタイルになる様子が面白い。世界最大の熊、白熊の水泳は、見応え十分だった。

白ライオンが2頭いたが、白虎のように白くはなく薄茶色だ。水族館では、マナティが2頭、飼育されている。ほかの魚と同じ巨大水槽で泳ぐ様子は圧巻。やはりターンは背泳スタイル。ポラー・ベアとならぶ、この動物園の目玉だ。

園内のホットドッグで昼食。3種類頼んだら、パンとソーセージは同じで、トッピングが違っただけだった。ジャーマンドッグはサワークラウトがかかるという仕方。

ゴリラの親子は、ローランド種で、3頭の子はまだ大きくはない。親ゴリラは、いつ見ても哲学的な顔をしている。ここでは、露天の運動場で見せていた。ニホンザルは、池の中之島の猿山暮らし。ギボンも島に居る。都市型で敷地はさほど広くはないが展示法がなかなか上手な動物園だ。週日なのに子供づれの親子やグループが沢山来ていた。入園料は11ドル、シニアは9ドル。白熊の模型と小さなクマの石彫りを購入。

雨が降りだしたので、南下してオハイオ河を渡り、ケンタッキーに入る。Historic German village と呼ばれる Main Strasse Village に下りたが、すこしドイツを感じさせる家・教会が並ぶ短い通りだった。

#75を南下するがときどき豪雨で前方が良く見えなくなる。

雨が止んで途中のアウトレット・モールに寄る。いたるところにファクトリー・アウトレットがあるようだ。これも比較的新しいマーケティングの方法だ。なかに99 Centerがあった。ダラー・ショップなどと同じく、日本の100円ストアの元祖で、いろいろなものを99セント+タックスで売っている。やはり中国製と書いてある商品が多い。

#75をGeorgetown方向に下りて、トヨタ工場の周りを走るが、さすがに広大な敷地だ。道を戻って、ウォルマートに寄る。巨大な建て屋のなかに多くの商品を並べている。この店はSuper Centerなので生鮮食料品も置いている。食品では、品種が日本より多いこと、甘そうなものが多いことを感じる。

ベスト・ウエスタンに64ドルで投宿。元は疲れて風邪気味。風雨が強いので、部屋でありあわせの夕食。

5・21 朝、トヨタの藤沢さんに確認の電話。DENSOの山中さんにも電話してファックスで地図を送っていただく。パンフレットでここがバーボンの産地であることに気づいて、9:00にチェックアウトし、フランクフォートに向かう。狭い道だが、牧場の間を走る快適なドライブ。牧場と道の境は、平たい石を積み重ねた堤や黒い木柵で仕切られている。競馬馬の産地でもあり、サラブレッドらしい馬が放牧されている。

Frankfortのインフォメーションで訊ねると、近くに大きなバーボン・ディスティラリーがあり、少し離れたところに小さいのがあって昼食もとれるという。時間の関係もあるので、近くのBuffalo Traceに入る。ゲートで許可を得て駐車し、Gift Shopに行くと、年配の男性がツアーをガイドしてくれた。ビデオを見たあと、原料・樽・エイジングなどを現物と模型で説明してくれた。原料はトウモロコシ・ライ麦・大麦で全部を粉にして糖化しイーストで発酵させ、ビール状の液を蒸留する。アメリカ・ホワイト・オークの木部の中間部分で樽を作り、内側を燃やして炭化させて蒸留液を詰めて倉庫で寝かせる。9年から21年のエイジングの後、瓶詰めにするが、内容量は、9年で70%に21年で30%に減少する。

次に、倉庫を見る。樽は静かに寝かせ、漏れはタガを絞めたりして防ぐ。気温が下がりすぎても良くないので、暖房設備がある。倉庫の床は隙間を空けた板張りで、空気の流通を良くしてある。

樽をあける工場は面白い。倉庫からレール状の道で転がされてくる樽が、小型リフトで1mほど上げられ、台の上の作業員が手でドリルを使って栓を開けて転がすと樽が傾いて、開いた口からバーボン原液が流れ落ちる。下は金属製の濾過メッシュになっていて、樽の内側の炭の破片などが漉しとられて、原液が下の受け皿からパイプでタンクに移される。おらかな作業を、すぐ近くで撮影もできる。

ボトリングは自動化されているが、手作業で瓶詰めする工場を見せてくれた。日本のディーラーが、別のブランドで、シングル・バレルをうたったバーボンを作らせている。1樽ごとにナンバーを付けて、処理水で薄めて86プルーフに調整して、手でボトルに入れ、手で栓をし、手でラベルをはって箱詰めしていた。10人くらいの小工場だから生産量は少ないが、高値で出荷できるのだろう。ただし、サニタリーについては全く保証できない感じだ。アルコールだから良いのかもしれないが？ ガイドに午後はトヨタを見学すると話したら、トヨタは工場がクリーンだと言っていたのと比べると、ここはちょっとクリーンとは言えない。日本のディーラーも、工員がチューインガムを噛みながら手詰めしているこの現場の写真は、あまり顧客に見せたくはないだろう。

ギフトショップに戻って、バファロートレース・ブランドの9年ものと、バーボン入りチョコレート、樽板を使ったチーズ切り板を購入。樽は1回しか使わず、スコッチやテキーラのディスティラリーに売るとのこと。

バーボンに必要なアンバー色は、オークの糖質が作るもので、1回しか使えないらしい。樽工場は、別に近くにある。140プルーフ近い原酒を86プルーフに薄める水は、裏を流れる川か

ら採り、ライムストーンなどで浄化して使う。今日は昨日の雨で川は茶色ににごっていたが、普段は清流なのだろう。

1770年代からの生産地で、独立戦争後発展したのだから、ハミルトン財務長官が自ら指揮して鎮圧したウイスキー撲も経験し、1920年代の禁酒法の辛さも知っている土地だ。

1時間半くらいのツアーと買い物だったので、2軒目の訪問は止めにしてジョージタウンに戻る。本場、ケンタッキー・チキンでピュッフェ昼食。日本ではあまり食べないので良く分からないが、本場ものはけっこう歯ごたえがある。バーベキューチキンよりもフライドチキンのほうがさっぱりしていて美味しかった。

2:00少し前にトヨタのビジター・センターに行く。藤沢さんが待っていてくださった。一般のツアーに混じって、ビデオを見てから、何台も繋がったトラム・カーで工場内を回る。エンジン工場・塗装工程以外のプレス、プラスチック成型、溶接、アッセンブリーの工程をかなり丹念にイヤホン説明（英語だけ）付きで1時間ほど回った。トラムから下りて、藤沢さんに訊ねるが、人事に12年勤務するベテラン女性なので、工程管理などに付いては不案内とのことで、後日メールで質問させていただくことにする。工場案内のパンフレットを頂いて帰る。

生産ラインは1988年操業開始当初は1レーンだったが、1994年に増設して現在は2レーンになっている。第1ラインではカムリとアパロン、第2ラインでカムリとシエナを生産する。エンジンの組立工場も備えているから本格的な一貫工場だ。混流生産ではあるが、1車種をかなり大きいロットで連続的に組み立てているので、効率は高そうだ。安全に力を入れていて、各所に標語が掲げている。工員の着衣は全くまちまちで、半袖のシャツも多い。作業単位ごとに、効率・コストなどの達成数値のグラフが貼ってある。カンバンも使われ、カイゼンやQCサークルもある。空間的には広く、通路も、見学トラムが部品運搬車の邪魔にならずに走れるくらい余裕がある。組み立てラインはたしかにクリーンで、従業員のロッカーや休憩机も片付いた感じがした。多分、UAWには加盟していないのではなかろうか。

州の平均以上にマイノリティを雇用しているとのことだが、組み立て工程ではアフリカン・アメリカンはあまり見当たらない。

#74を南下して、レキシントンからノックスビルに向かう。途中、ワッフル・ハウスで休憩して、ワッフルを食べる。ホテルのワッフル・メーカーよりも目の細かい焼き道具で、さすが歯ざわり良く焼き上げていた。アップルパイは、甘すぎ。肥満の素だ。

Londonを過ぎて、ダニエル・ブーンの名が付いた国立森林あたりからカンバーランド山地に入る。丘を切り通したハイウエーの両側の岩の理目は、ほとんど水平に走っている。パイ状で、平石が採れそうだ。ウィリアムズバーグあたりからは、すこし傾斜した理目も見られるが、しゅう曲は軽度で、地殻変動は極めて少ない感じがした。

テネシー州に入ったあたりから霧が沸いてきた。アメリカの山水画があるとすると、このような絵柄になるだろう。右側には溪谷が続いている。ハイウエーにはトンネルはないが、枝道にはあるらしく、通行可能な車のサイズが表示されている。標高は腕時計によると450mくらいが最高だ。山地を過ぎると緩やかな起伏の平地で、ノックスビルに至る。さらに南下して空港付近に泊まることにし、MaryvilleのDENSOの場所を確認する。広大な敷地だ。アルコア市に戻ってスーパー8モーターに71ドルで投宿。歩いて中華ピュッフェからテイクアウトで夕食を買って帰る。ここでは、テイクアウトとというよりもTo goという言い方が普通だよ

うだ。ファストフード店では、Here or to go?という質問になる。モーターの前庭では、バーの夫婦が夕食。

5・22 朝は道沿いを歩く。シシウドとヤブジラミの中間ほどの大きさのセリ科の花が咲いている。ハルノノゲシ、赤いノイバラ、紫の矢車草、白菊、クサフジ、スイカズラ、オヤマボクチのような紫の花 = 多分オニノゲシ、コウボウムギ、コナクサなどの禾本科のくさ。日本と良く似た植物相だ。そういえば昨日はカンバーランド山地で、松が大量に枯れているのを見た。排気ガスか、マツクイムシか？

ALCOA の工場の前を通る。この町には ALCOA City という名前が付いている。なぜここに立地したのだろう。

朝食後、グレート・スモーキー・マウンテン国立公園に走る。アルコア市から小1時間で、案内所につく。海拔 300m くらいではあるが、高原の風情。アパラチア山脈の西端にあたり、谷は深いところもある。公園内をドライブできるが、時間の関係で案内所で引き返す。メリピルのピザハットで、ピュッフェの昼食。いろいろな種類のピザを選べるし、サラダ・バーで野菜を食べられるからなかなか良い。飲みものをに入れて@7 ドル。

1:00 に DENSO 訪問。山中副社長と大西コーディネータが社長室兼役員会議室で事業内容を説明して下さる。1985 年からの工場、今年、近接した Athens 工場を分社化した、両工場で正規従業員約 3000 人を雇用する規模。日本のデンソーが、安城はじめ数工場に分かれて生産する部品を、ここでは 1 工場内で生産している。新しい Athens 工場に日本の生産ラインをそのままの形で設置したので、現地従業員への教育に日本人が必要だし、Maryville 工場の場合でも機械類のメンテナンスができる現地人材は少ないので、日本からの出向が多いとのこと説明。

道の反対側の電子部品工場へ山中さんが運転する車で移動して、Electronics Plant 責任者の高阪副社長に案内していただく。エンジン CED はじめ各種の電子制御装置を製造している。樹脂基盤に数多くの部品を組みつけていく工程を、細かく見せていただいた。

静電気防止用の上着と靴カバー、防護めがねを着けての見学が終わってから、二人の副社長からお話をうかがう。労働者の質は、このあたりが宗教心の強い地域のせいもあって良いとのこと。ただ、アメリカ人特有のおおまかな気質が、電子装置の取り扱いの際に要求される繊細な気配りと背違する場合もあるらしい。

白人が多いのは、ここの人口構成を反映したもので、マイノリティや性別に配慮した雇用は普通通りに行われている。雇用は、職種ごとに必要が生じたときに随時、新聞広告や社内広報を通して行っている。新規採用の決定は、職場ごとのボスが行い、人事課は大枠で関与するだけだそう。雇用されると、職場内の職種ランクアップはあるが、工場・職場間の移動はない。複数のジョブをこなす従業員もいるが、日本のようなジョブ・ローテーションをやるわけではない。高度にロボット化された作業が多いので、機械装置のメンテナンスをやるほどの多能工はいない。

労働者の時給は、テネシー州平均の水準で、この地方平均よりは上とのこと。農牧業やサービス業からの転職が中心で、アルコアなどとの労働市場での競合は少ないらしい。

労働組合はなく、団体協約もない。会社との話し合いの機会はいろいろと設けていて、関係は良好。QC サークル、カイゼン提案制度も、日本ほどではないが機能している。特別のインセンティブは与えていないが、開業時の従業員が今の指導的労働力となっているように定着率は高く、会社の成長が雇用の安定に繋がるという意識は強いとのこと。

部品については、デンソーの関係メーカーが現地工場をつくるケースは無く、重要部品は日本からの輸入で、金属ケースなどの一般部品を現地調達している。現地調達品は、ジャストインタイムに近いが、輸入部品は1週間程度の在庫を持つことになる。

顧客はほとんど全てのアメリカ自動車会社だが、やはり最大は、トヨタ。デンソーのメキシコ工場の生産品も、ここが物流拠点となって全米に流している。

長時間のご案内、ご説明に深謝を申し上げてお別れする。充実した工場見学だった。

3 : 3 0、# 7 5 を北上開始。Norris のアパラチア博物館に寄るが外観だけでパス。元が眠くなったので、久しぶりにハンドルを握る。London から # 8 0 を経て Cumberland PKWY に乗る。車の通りは極めて少なく、見通しの良い長い区間に前方に1台、後方にも1台という程度。有料道路で、90セントと80セントずつ2回払う。開拓時代にダニエル・ブーンらが活躍し、幌馬車隊が進んだ道かもしれない。山地を抜けると、広大な牧場が続く。

Glasgow で運転手交替して、Cave City に向かう。宿さがしをするが見当たらないので # 6 5 に乗ってみる。高速道路だと出口付近に Lodging や Gas、Food の案内看板があるから便利だ。途中の Rest Area で Discount Guide を発見したので、引き返して Cave City で下りて Best Western に投宿。ガイドブックに掲示された料金、1 ~ 4 人で37ドルを適用してくれた。平屋の小さいインだが、部屋はツイン/バスの標準レベル。この価格は安い。

近くのレストラン Cracker Barrel で夕食。ビールを頼んだら、ここはドライシティでアルコール類は無い。ビーフシチューはボルシチそっくり、バーベキュー・ポークはコンビーフ状でちょっとビックリ。コーン・ブレッドは、戦後のトウモロコシパンを思いださせる味。ここは田舎料理のチェーン店で方々で見かけるが、入ったのは初めて。店内は民具が壁を飾り、大きな暖炉がある。聞くと冬には薪を燃やすそうだ。

閉店時間の10時を過ぎても客が入ってくるので変だと思ったが、部屋に戻ると時計は10時前。おなじケンタッキー州でも、ここは中部タイムゾーンだった。時計を1時間遅らせて、最後のナイアガラ赤ワインを開ける。

5・23 Crystal Onyx Cave に向かう。Mammoth Cave と Diamond Cave よりも良さそうなのでここを選ぶ。9 : 0 0 からのツアは、われわれ3人だけで、若い女性がガイド。1960年代に発見された洞窟で、小さな地下池にはかつてはメクラウオが生息していたり、ネイティブ・アメリカンの埋葬遺体が50体ほどが発見され、ワシントン大学が調査中という洞窟。石筍の形状は様々だし、石質も多種で、かなりバラエティ豊かな鍾乳洞だ。梯子を下りたり登ったりの約1時間のツアは面白かった。ガイドにどのCaveが一番好きかと聞いたら、もちろんここで、収入にもなるから好きとの答え。ごもっとも。

石のクマたちが沢山いる。小さなのとランプが灯る重いのを購入。小さなのを数種買おうと思ったら、二人が重いほうを推薦するので、帰りの荷物を思いやりながら、あえて購入。化石の程度の良いのも売っていた。

# 6 5 を Bowling Green まで下って、William H. Natcher PKHY を北西に走る。有料で 40+50+60 セント 3 回に分けて払う。Owenceboro からの Audubon PW も有料で 5 0 セント。Tollroad といっても、この値段だから、集金係の給料がまかなえるかどうか疑問だ。Evansville 手前で中華ビュッフェの昼食。サービスの中国女性に訊ねると、本土から来て 1 年とのこと。

オハイオ河を渡ってインディアナ州に入り、# 164 を北上して # 64 を西へひたはしり、イリノイ州を通過してミズーリ州セントルイスに着く。6 時間あまりの長距離ドライブを、元が一人でこなす。

マリオットは 9 9 ドル、ハンプトンは 1 0 9 ドル、ハイアット・リーゼンシーは 1 1 9 ドル。ユニオンステーション内の駐車料金が 1 2 ドルかかるが、ハイアットに 2 泊することにする。ユニオン・ステーションにある古風なホテルで、かつての駅ホテルの増改築。駅自体が、モールに改装されていて、ショップやファストフード店が入り、人工池にはボートが浮かんでいる。

部屋は普通の調度で、窓はモールを見下ろす位置にある。ステーションホテル特有の眺めだ。かつては、列車の乗客の行き来が見えたのだろう。

ホテルに入る直前に街中から黒煙が立ち上るのを見た。近くなので行ってみるとビルの火事。セントルイス消防署のすぐ前だが、応援の消防自動車が次々に駆けつけて来る。パトカーも集まってきて、道路を封鎖した。なにが燃えたのか分からないが、ものすごい黒煙が 2 本上がった。火事見物でチェックインが少し遅れた。

Maggie O'Brien's で、バーベキューのポークとチキン、ベークド・ポテト、フレンチフライをテイクアウト。Takeout といったら To go? と聞き返され、請求書には Carryout と書いてあった。ソースが甘い、BBQ らしい味で満足。薬を飲むのをサボっていたためか、摂取カロリーが高すぎたせいか、右足の甲が痛い。痛風の前兆だ。靴が履けなくなると困るので、ワインは控えめにする。

5・24 ゆっくり休んで 10 : 00 ころ Gateway Arch に行く。大きなステンレス製のアーチで中に入るとてっぺんまで行けるらしいがパス。ミシシッピ遊覧船もあるがこれもパス。Farmers' Market に行くと、果物と野菜を中心に、肉類・ハム・ソーセージ、チーズ、花・野菜の苗、化粧品、香辛料、衣料、雑貨を売る店が、常設建物のなかに並んでいる。市価よりかなり安いらしく、買い物客でごったがえしている。アメリカサクランボとオレンジを購入。長い型のスイカが @ 3 . 5 ドルだから安い。3 月の中国でもスイカの安さに驚いたが、とにかく、日本は生鮮食料品が高すぎる。

バドワイザーの工場ツアーに向かう。ツアーの時間が分からないので、とにかくと思っていくと、老若男女、子供連れがどんどん車でやってくる。フリーの駐車場があり、ツアー受付に行くと、次から次へとツアーを出している。われわれも、すぐに 6 0 人くらいの集団に入った。ギフトショップ、試飲ラウンジのあるツアー専用の建物で、赤く塗られた綺麗なビール輸送馬車の前でツアーの説明をしてから、馬の厩舎に案内して、Anheuser Busch 社の歴史の説明ビデオをみせる。

最後に社長の Busch3 世がビデオのなかで歓迎の挨拶。かつて輸送馬車を 8 頭立てで挽いたヒズメの大きい馬が数頭飼育され、立派な馬車、馬具が展示されている。

第 2 段階の醸造槽が並ぶ工場に行く。第 1 次発酵後の液を、5 × 60cm くらいの Beechwood の木片をいれたステンレス槽で 2 次発酵させてビールを完成させる。このプロセスははじめて聞いた。

次の建物では、製造工程の説明ビデオをみせてから、モルト・大麦と米の粉の糖化槽、イーストとホップを加えての第 1 次発酵槽を見学。ツアー専用の大きなエレベータで 3 階に登り、階段を下りながら見る仕組み。最後は、製品の瓶詰め・缶詰め作業工場で、ここには、専用の昇降エスカレータが設けられている。この工場を出たところから、赤いツアバスでもとの建物にもどり、試飲ラウンジで、各種の製品をフリーにいくらでも飲ませてくれる。プレッツェルのおつまみもくれる。5 種ほど楽しんだが、新鮮なビールは、どれも美味しい。

レモンスカッシュのような軽いビールも試したが、これは日本にはなさそうだ。子供にはジュースなどのサービスがあり、家族でツアーを楽しめる。ラウンジ入り口で、元は身分証明書の提示を求められた。この国では、21 歳未満は飲酒禁止だし、アルコール類を買うこともできない。見学にはみな車で来るのだから、出口で検査すれば飲酒運転になる人も居るに違いない。そこらは、セントルイス市警察も心得て、市を代表する目玉産業会社のツアーには目をつむっているのだろう。

1890 年代に、ドイツ系移民の Busch が義父の Anheuser とはじめた会社で、今では全米シェア 50% を越える世界的なビール会社に成長した。ここが本社工場で、ほかに全米に 5 ~ 6 工場あるようだ。日本ではキリンが依託生産している。見学ツアーへの力の入れ方を見ても、PR の巧さでシェアを伸ばしたことがうかがわれる。工場内も、シモツケ・アジサイ・パンジー・バラなど季節の花が咲き乱れて綺麗だ。

フリービールで良い気分になったが、痛風のため元気が出ないので、ホテルに帰って休息。恵子も元もぐっすり昼寝をした。ドライブの長旅で疲れはたまっているようだ。

ユニオン・ステーション駐車場のそばには、かつての Southern Pacific の機関車と客車が、低いプラットホームに停車している姿が、現物で残されている。大きなアーチ形ドームの南端には、St. Louis Union Station と大きな文字が残る。西部開拓の花形、鉄道と駅が、いまはモールと駐車場になっている有様は、歴史の変化をまざまざと示している。

ユニオン・ステーションのなかの Landry's Seafood House が案内パンフレットで評判がよいので、夕食。スモークサーモンの杉板焼き、フィッシュ・プレート、ダンジネスクラブの塩茹、魚貝の Pasta。ドライで食べる。量が多くて、さすがの元も食べきれず残りはキャリイアウト。85 + 13 ドル。子供づれの客が多い高級ファミレスという感じだが、Pasta を除いては味は良い。すこし塩が強いのは、アメリカの一般的な特徴だと思う。肥満で塩分を採りすぎるのだから健康には良くなかろう。

土曜日でモールを歩く人は多い。屈託無く、楽しそうに見える。豊かな国であることは間違いない。髪を後ろで白い帽子にまとめ、ロングスカートを着たご婦人たちはアーミッシュの人だろう。今朝はファーマーズ・マーケットでも見かけた。駐車場に馬車はなかったが昨日、インディアナでも、馬車に注意の道路標識を見たから、方々にアーミッシュの人が住んでいる

ようだ。

5・25 朝はメトロリンクに乗ってミシシッピー対岸の駅で下りる。アーチを撮ろうという計画。河沿いの鉄道線路を渡って土手の上を歩くと、思惑どおりに Old Court House がアーチの中に入った写真が撮れた。ここイリノイ州側には Casino Queen がある。陸上にホテルやレストランを備えた大きな建物と駐車場があり、地下道で河に浮かぶカジノ船に行く仕組み。対岸には President Casino on the Admiral があり、このカジノ船はとても大きく、河岸には駐車場だけで、船内にいろいろの施設があるらしい。陸上でなければカジノはつくれるので、セントルイスのはずれのセント・チャールズにはミズーリ河にカジノ船が浮かんでいるらしい。ピオリアにもイリノイ河の船上にあるようだ。

イリノイ側にはカーギルの穀物サイロがある。鉄道で入ってくる穀物を、ミシシッピー河の輸送船に積み込むコンベヤーが設置されている。一部撤去したサイロ跡があったので操業中かどうかいぶかしく思いながら引き込み線を歩いていたら、カジノの警備車の運転手が危ないと注意してくれたところを見ると、まだ現役サイロであるようだ。

メトロリンクは、固定連結された2客車が2両連結で走る紅白ツートンのスマートな電車で、セントルイス空港とイリノイの College 駅を結んでいる。ユニオン・ステーションから乗るとスタジアムからアーチまでは地下鉄になる。日曜日の6時台は2便しかなく、大分待たされた。乗客はほとんどが黒人で女性が多い。職場に通勤するのだろう。帰りには、Security の制服を着た大きな黒人女性が検札に来た。往復シニアで1.2ドル。

昨夜の残りで朝食。ここのモールのコーヒー専門店で買ったスプレモをいれたがローストが強すぎる。アメリカン・コーヒーはフレンチ・ローストとミディアムの間くらい炒りで、これをやや薄めにいれるようだ。蟹はやはり酢醤油が美味しい。サクランボ Bing Cherry は、まずい。サクランボとアルプス乙女のような歯ざわりで、日本に来るまでに過熟してこの歯ざわりが無くなるから、サクランボ的になるものと思われる。4個1ドルのネーブルはやや甘味が乏しい。

パンフレットにあった歴史的街というセント・チャールズに向かう。ミズーリ河を渡るとたしかに古風な街で、歴史大通りには、2階のベランダが道の歩道の上に突き出している「ガンギ」風の家がある。日曜日で11時開店の店が多く、客はウィンドウ・ショッピングを楽しんでいた。

セントルイスに戻って美術館を見ようかと思っていたが、元が北に行くとマーク・トウェインの街があることを思いだしたので、このまま北上して Hannibal に向かう。ミシシッピー河沿いのミズーリ州の市で、メインストリートは臨時の露店で賑わっていた。これまでには見かけなかった木製・金属製の装飾的小物を売っていた。木目の美しい木をそのままに使った小箱、寄木細工のコースターなど洒落ている。金属薄板やプラスチックで作った亀・蝶・トンボなども愛嬌があって良い。

通りの突き当たりにハックルベリー・フィンとトム・ソーヤーの立像が立っている。ズボンのすりきれている方がハックだろう。通りの左側にはトウェインの生家や父親の法律事務所、トムの稼いだペンキ塗りの板塀とか、トムの初恋の娘の生家とされる家もある。博物館は二つあるがパス。

河に出ると、遊覧船が待っている。乗ろうかと思ったが30分以上の待ち時間なのでパス。河には細長い島がいくつかあって、トムたちの冒険の現場のようだから近くで眺めるのも一興かと思ったまで。たしかに、ここは、河近くなのに起伏のある美しい街で、鍾乳洞もある。トウエインの想像力を培うに適した土地柄だと感じられた。

河を渡ってイリノイ州に入り、クインシーから#24を走る。広々としたなだらかな丘に牧場や畑が見つく。アンガス牛牧場との看板があるファームでは、黒毛牛が飼われていた。黒毛の牛はここでも珍重されるらしい。

小さな街が点在するが、レストランは無い。やむなくハーディズでハンバーガーの昼食。マックより味は良いようだ。カップもポテトも小を注文するが、日本の中か大くらいの分量はある。

極度の肥満の夫婦が食事をしていて、脇には、電動車椅子がある。車椅子といっても、バギーを小ぶりにしたような大型4輪車。ご主人が乗って、ご夫人は4つ足の大型ステッキで席を立つ。車椅子をどうするのかと思ったら、大型セダンの後ろに小型リフト式のキャリアが付いていて、そこに乗せて立ち去った。肥満で歩行が不自由になった結果だろう。過食・肥満・運動不足が悪循環を形成したに違いない。ご主人は帰りがけに、ドリンクをリフィルしていった。ここには紅茶はなく、甘い飲み物だけだから体重はさらに増えつづけることだろう。

途中で簡易家屋の展示場がある。ところどころで見かけるもので、細長い家を縦に半分に切った部分をトレーラー式に移動できるようにして、二つを合体させて一軒家にする仕組み。かなり安いのだろう。建坪はかなりありそうだ。アメリカの大量消費は、住宅の広いことに関係していると思う。電化製品や家具・敷物・装飾品の収容能力は日本よりはるかに大きい。大型耐久消費財の消費量がすごそうだ。衣料品などにはさしてお金をかけているようには見えないし、ブランド品嗜好は弱そうだから、消費の構造が日本と違うのではないか。

5:00頃、ユーリカ大寄宿舍に到着。4000マイルのドライブは無事終了。出かけたときに比べると緑がすっかり濃くなっている。休暇中でだれもいないのに冷房が効いている寄宿舍のロビーで荷物の整理。元の本なども持ちかえるので、段ボール2箱+旅行鞆+手荷物2つになった。成田から宅急便を使うしかない。

前に泊まったワシントン市のスーパー8モーターに投宿。キングベッド/バスで@49ドル。近くの中華ピュッフェからのTo goで夕食をと、二人が買い出しにいったが、8:30過ぎで閉店。スーパーの食品で済ます。元は寄宿舍に帰る。

5・26 朝、宿の裏手を散歩。Washingtonと書かれた水道塔が立つところまではConstitution通りだがウォルマートで行き止まり。表のWashington通りに比べると名前負けも著しい。野原にはシシウドを黄色くした花が咲いている。昨日のドライブ中にオミナエシかと思った花だ。これは日本には無いと思う。ゴルフ場には、先日楓の実を食べていたリスはいなかったが、白と青のアヤメが咲いていた。6時頃なのに、もうゴルファーが2人いる。今日はメモリアルデーで休日だ。2、3日前から、お墓や記念碑は花と国旗で飾られている。靖国神社の例大祭のようなものだが、戦前の日本では、この日は休日ではなかったと思う。

道で驚くのは電柱で、高圧鉄塔以外は大小の木柱が使われている。腕木も木の角棒。6段碍子以上の中圧送電は2本柱の鳥居形。低圧は1本柱で、4線くらいを送っているが、支えの柱

や鉄線などはないから、かなり傾いているのもある。根もとから下は防腐剤を塗っているようだが、地上部は風雨にさらされて節がごつごつし風格もある。郊外では、住宅がとびとびなので、1軒ごとに小さな変圧器で処理しているから木の1本柱でも大丈夫らしい。

9:30元が迎えに来て大学に向かうと、ユーリカ市のメインストリートに見物人が集まっている。メモリアルデーのパレードがあるらしい。見ると星条旗を先頭に銃を担いだ在郷軍人会メンバー、市の顔役たち、高校ブラスバンド、ボーイスカウト、クラシックカー、クラシクトラクター、騎馬隊、トラック、消防隊などの行列が通過する。車からは沿道の子供達にキャンディが撒かれる。みんな袋を持って、喜んで拾い集める。元もはじめて見るパレードだという。

寄宿舍で洗濯や片付けをしてから、賢二君をたずね、近くの地元ピザ屋で昼食。ピザ・ハットより良いかと期待したが、やはり、トマトソースがありきたりで、似たようなものだった。壁には古風なビールの宣伝看板やスタンドグラス飾りが掛かっていて雰囲気は良い店だ。夜は居酒屋になるから、そのときの方が面白そうだ。

ウォルマート、シアーズなどでショッピング。鋏型でない押し切り型の植木ばさみを買う。日本にはあまりない鋏だが、太めの枝を切るには良い道具だ。二人は、加熱用ローソク、マフィン焼き型のほかに電熱ワッフル焼器を買う。メープルシロップを仕入れたので、ワッフル焼きが必要になったというわけ。

日本にはほとんど無くてアメリカで良く見るものは、芝刈機とバーベキュー機。芝刈機はエンジン付きの手押し機は100ドルくらいからあるが、今の人気はバギーのような乗用型で500ドルから1700ドルくらいする。あまり広くない前庭でもバギー型で刈っているのを見る。エンジン無し手押し機時代から、電動式かエンジン式手押し機にうつり、さらにバギー式になったようだ。

バーベキュー機は、小型ガスボンベ付きで温度調整できるグリルをゴム車輪で動かせる形式のものが100ドルから200ドルくらいで売られている。バーベキューが盛んで、専用のナイフ・フォーク・フライ返し・刷毛などの高級品も多種ある。木炭を使った時代から、石油加圧燃焼機、ガス加熱機と移ったのだろう。都市では電力による空調・温水化・調理が普通だが、郊外では、ガスも利用されていて、建物から少し離れた庭に小型潜水艇のような形の大きなボンベが置いてある。

芝刈の運動量は最小化され、手軽にできるようになったバーベキューで高エネルギー食品を摂取すれば、結果は明らかだ。ゴルフ場が1日15ドル前後で利用できるのが救いだ。

気がつくのと、到着直後に見つけたイラク戦争特集雑誌は、いつの頃からか分からないが無くなっている。テレビもほとんど報道しない。もうイラク戦後なのだ。新聞の経済欄は、イラク戦争が終わっても戦後需要は盛り上がらないと嘆いている。

ピオリアの案内パンフレットに記載されていたクーポンを使って、ベスト・ウエスタンに3人で55ドル+タックスで泊まることにする。

6:00から、休場さん一家、賢二君とイリノイ河岸の魚料理店で夕食。キャタピラーに勤めるお嬢さんをご両親が訪ねてこられたので、ご一緒する。公文教育研究会に勤務しておられたお

父上は、大学からは二人のお嬢さんを自由に任せる方針をとられた。上のお嬢さんは、イギリスでマスター取得後、マイクロソフトの技術職になって家庭を持つ。裕子さんはノルウエーでマスター取得。マリンテクノロジー、特に橋梁工学を専攻して、キャタピラーに就職。国際的活動をする子供たちを育てたご両親だ。

タラバ蟹・ズワイ蟹・ダンジネスクラブ・ロブスターテイル・鯨などを豊富に楽しむ。8時過ぎても外は明るい。岸边には後輪の遊覧船が停泊しているが、今日は運休。暗くなると、橋の灯が川面に映って美しい。写真を撮るが、デジカメはFが敏感で、明るく写りすぎてしまう。

店の客でタンクトップ、おへそだしの若い女性がいた。バックの開放部にサイズを合わせたような刺青があるのでビックリした。たしかにアメリカ人は刺青が好きなようで、Tattooの看板をよく見かける。女性の小さい刺青もみるが、今夜ほどののは初めてだ。

部屋に帰って、最後のナイアガラ白ワインを開ける。

5・27 朝、散歩。ここのベスト・ウエスタンは、片側2車線のWar Memorial通りに平行に走る片側1車線のBrandy Wine小道からさらに私道を奥に入った静かなところにある。指輪物語にブランディワイン川が出てくるが、トールキンの造語と思っていた。実在するとは！

珍しくジョギングする人たちに7人会った。4人のグループと単独走。1人を除いて、肥満ではない体形だ。ジョギングとダイエットの流行が、アメリカの過剰富裕化開始の象徴と指摘したのは馬場だが、いまや、ジョギングは衰退しつつあるのではなからうか。多くのアメリカ人は、肥満との戦いを放棄したようで、過剰富裕化は成熟期に入っているような印象を受ける。フィットネス・クラブや健康機器の需要動向を見してみる必要はあるが。

住宅地を歩くが、ここは500坪くらいの敷地に大きな平屋が並んでいる。フェンスはなく、前庭とバックヤードは芝生とかなりな樹齢の大木。なかには花木・草花をきれいに植えている家もある。白や赤・紅のシャクヤク、白・青・紫のアイリス、赤・黄色のシャクナゲなど、なかなか美しい。すべての家の前庭の芝生は刈りこまれている。芝刈りバギーが活躍したのだろう。

道路面にゴミ箱が出ている。小さい車輪が2つ付いたタイプが普通。ひとつの家もあれば、3つくらいの家もある。複数の場合は、Yard Waste OnlyとかLandscape Waste Onlyと書かれたゴミ箱がある。少しは分別するのかもしれないが、基本的には混ぜこぜゴミ出した。連休で家庭大工をやったらしく、ドアとか窓枠など大ゴミも捨ててある。古いパーベキュー台を捨てた家は、新式のBBQ装置を買ったにちがいない。どのようなゴミ処理システムか気になるが、回収車には出会わなかった。

道沿いに浅間石か富士溶岩に似た大きな火成岩を幾つか置いたところがある。水成岩の多い土地だが、どこに行ったら火成岩があるのだろう。

ホテルの道に雪が降ったようにタンポポの綿毛が積もっている。あたりにタンポポは無いので不思議に思ったら、大木に綿毛の房がぶら下がっている。見たことのない樹木だ。チューリップ・ツリーがあるのだから、これはタンポポ・ツリーというところか。

朝食には、ソーセージ・グレービーとビスケット・パンが出ていた。細切れソーセージが入っている濃いクリームシチュー状のものをビスケットパンにかけて食べる。初めてのものだが、元は、ここでは良く食べるとのこと。ワッフル焼き器もあるが、甘いドーナッツ、ペストリ系は出ていない。

今日のUSA Todayの経済面には、去年一番成長した外食産業は、ドーナッツで、Krispy Kremeが38.7%、Tim Hortonsが20%、最大のDunkin' Donutsも8.1%売上を伸ばしたと出ている。朝食の定番であったドーナッツが、午後から深夜の時間帯に売れるようになったという。「不況になるとドーナッツは良く売れる。1ダースで5ドルは家族を養うのに安上がりだ」とは、ダンキンドーナッツの技術者の談話。もちろん、栄養学者の警告ものっている。「アメリカ人は、ヘルスクラブにドーナッツをかじりながら車を走らせる。ドーナッツはアメリカ人のライフスタイルには適しているが、アメリカ人のウエストラインには不適だ」と。

同じ経済面の真中には、Depressionと大きく書いて、両親や祖父母が話していたことを思いだしてみようと呼びかけ、物価下落・失業率上昇・世界経済後退・金融崩壊の4人の騎士は、まだ来てはいないがヒズメの音は近づいていると警告する記事が載っている。日本は10年続きのDeflationary recessionのなかに在り、ドイツもそれに加わりそうだ、アメリカもそうなる危険性は30%くらいあると書いている。

チェックアウトのときに訊ねると、タンポポツリーはCottonwood treeという木で、ここらに沢山あるとのこと。たしかにホテル周辺には5・6本ある。しかし散歩した範囲には無かったから、やはり珍しいのではないか。車で通ると、風に綿毛種子が舞って美しく光っていた。

元の部屋の引越しを手伝う。夏学期の2ヶ月余りを別の学寮で過ごすので、250mくらい離れた部屋に移る。賢二君も手伝ってくれた。こんどは2人部屋だが狭いので窮屈そうだ。

昼食は近くで唯一の中華料理店のビュッフェ。この国ではパフェと発音している。@5ドルと格安。

午後も引越し。夏の寄宿舎は、かなり古い3階建てで内装も綺麗とはいえない。2階の部屋で、同室者も越してきたが、おもに同級の女友達の部屋で住むとかで、事実上、1人部屋として使えるらしい。同室者が大きなテレビとDVDプレーヤーを持ちこんで、そのうち冷房器も友人のところから持ってくるというから、住環境としては良さそうだ。寮の前では野ウサギの夫婦が遊び、大きなオダマキの花が咲いている。日本のオダマキの4倍くらいの大きさで、色も濃い。オニアザミにしても大きな花だった。この広大な国では、花も大きく咲くのだろうか。

帰りの大荷物を積んでホテルに向かう。途中、ホストの家によって、奥さんにお別れの挨拶。Peoria Castle Lodgeに投宿。3人で59ドル。屋根が板葺きで、小さな塔を持つ古城風のロジ。調度も古風で雰囲気が良い。

元は空港に車を返しに行く。帰りは賢二君が乗せてきてくれる。レンタカーの追加料金は260ドル。寿司屋に出かける。韓国人の経営で、綺麗なフィリピン人が働いている。マグロは良いがハマチはダメ。アボカドの握りは意外に美味しい。レインボー巻とは、カリフォルニア巻を逆巻きにして、回りにマグロ・鯛・サーモン・アボカドを巻きつけて小口に切って虹状のアーチ形に盛り付けてある巻き寿司。刺身・てんぷら・抹茶アイス。ビール・日本酒・ソノマの白ワイン。日本酒はイカのような形の青色陶器に入ったアメリカ産で、聞いたことの無い横文

字会社の醸造だがまああの味。全部でチップ込みで300ドルの豪遊。五輪の恋人よから、藤圭子のヒットまで、懐かしのメロディが流れつづけていた。アメリカ人の客で繁盛している。

ロッジに戻って内部を見物。がっしりした木製家具や、古いピアノかチェンバロ、ガスの炎が上がる暖炉に、壁の古そうな肖像画など、ドイツ風の内装と自称しているが、ドイツでこの様な内装のホテルは見たことがない。バーの前には、巨大な黒クマの剥製立像がある。このオーナーが、1970年にロシアのUelen近くで獲ったクマで、体長9.1フィート、体重1027ポンド。ひぐまサイズで、黒クマとしては最大の部類だろう。

5・28 4時にコールを頼んだが、3時半に起きてしまい、段ボールの紐掛けをする。4時半にロッジのセキュリティの車が空港まで送ってくれる。荷物検査に備えて開けられるようにしておいたが、回りを白い紙のようなもので外部からなぜただけでOKのハンコ。6:10定時に離陸。元は、7時過ぎに帰国するご両親を送りにくる休場さんを待って、ケンジ君の家まで乗せてもらう約束になっている。ピオリア空港で3ドルでキャリアを借りた。当然返金されると思っていたら、25セントしか返ってこない。ずいぶん高いキャリアだ。

天気がよく下を眺めながらの飛行。道を走っていたときには気づかなかったが、散水のために円形になっている農地が沢山ある。ピオリア付近はカボチャの産地で、パンプキン・シティとも呼ばれるらしいから、これからカボチャでも栽培するのだろう。いまは、トウモロコシが20cmくらいに育っている季節だ。

1時間40分ほどでアトランタ空港着。地下のトラムでターミナルを移動。成田行きDL55便は、1時間ほどの待ち合わせで定時にエプロンを離れたが、タクシーウエーに進まず停止。機長アナウンスは、乗客が1名乗っていないので、荷物を下ろすためにエプロンに戻るとのこと。動き出す前に分かりそうなものだ。荷物を下ろしたのか乗客が乗ったのかアナウンスは無いままに再度動き出して、45分遅れで離陸。

日経・朝日・US Today をもらって読む。USによると、依然としてアメリカの住宅売買は盛んで、4月は前月比で、新築が1.7%、中古が5.6%増えた。金利が安いので買い替え需要が続いている。たしかに、各地で、ニュー・ホームの看板や、建築中の住宅、開発中の住宅団地を見かけた。Relocation 住み替えは、住関係の耐久消費財の需要をとまなうから、アメリカの個人消費支出を大きく下支えしているに違いない。

有料になったからドライで機内食。ますますもって味気ない。ワインやブランディを楽しみながらの空の旅も、いまは昔の物語。

5・29 1:25、定時に成田空港着。2003年アメリカの旅、無事終了。

(2003年5月アメリカ日記 完)